

元明清期に誕生した詩跡初探

— 醫巫閭山・點蒼山・盤山・滇池・薛濤井・盧溝橋・采石太白樓（謫仙樓）・濟寧太白

樓・晴川閣・泉州開元寺・于忠肅墓・烏魯木齊・伊犁・嘉峪關・山海關—

植 木 久 行

詩跡とは、豊かな中國文學によって生み出されてきた重要な文學空間を表す術語である。詩歌によって著名になり、ある特定の詩情やイメージを豊かにたたえるようになった、各地の具體的な名所（名どころ）をいう。それは、單なる名勝古跡とは異なる、詩歌を主體とした概念であり、歴代の詩人たちに詠みつがれ、次々と新しい變奏を積み重ねて、詩歌の創造に點火して表現の核となる力をたたえた地名（古典詩語）なのである。詩歌によって生み出され、詩中に詠まれた獨自のイメージや情感・語彙・發想など、さらには作詩時のエピソードまでも、一瞬のうちには讀者の心に喚起させる働きを持つ。いいかえれば、當地獨特の地理的空間や自然景觀だけでなく、代々その地（對象）に刻みつけられ、託されてきた豊かな詩情と長い風雅の傳統を強く呼びさます連想機能を持っている。そうした具體的な詩跡

のなかには、宮殿・樓閣・橋梁・園亭・關隘・祠廟・舊宅・墳墓・寺觀などの人工物も含まれる。たとえ詩的繼承性は乏しくとも、それを詠んだ詩と一體化して認識される具體的な場所は、すでに充分、詩跡として確立している。⁽¹⁾

松浦友久「詩跡（歌枕）の旅―名詩のふるさと―」（『漢詩―美の在りか―』所收）にいう、「かりに、もし、中國の廣大な風土において、こうしたさまざまな詩跡が形成されていなかったとしたら、中國詩歌を愛する古今・内外の讀者にとって、その風土の魅力はほとんど半減されてしまうであろう。歴史や風土を抒情化する名詩の存在によってこそ、その地名は強い詩的喚起力をもって永遠に輝くのである」と。

悠久の歴史と文學の傳統を有する中國で、最高の文藝様式として認識されてきた詩歌に彩られた詩跡は、廣大な各地に點在

する。ただ各地に均等に存在するわけではなく、集中する地域もあれば、ほとんどない空白地域もある。それは政治や文化を擔った作者層である士大夫（讀書人）の行動範圍（都城周邊、交通幹線に沿う赴任・左遷・行旅地、あるいは行樂・參詣地など）と密接に關連する。

詩跡の形成過程は、一般にある具體的な場所が詩中に詠み込まれることから始まる。この詩材化が、いわば詩跡化の第一歩（予備段階）である。對象の特色を集約的に捉えた詩が詠みつがれ蓄積されて、しだいに普遍的なイメージが形成されるとき、詩跡としての地位を獲得する。しかし詩跡化の予備段階を缺いたまま、初めて場所を詠みこんだ名作が、當地を一氣に著名な詩跡にするケースもある。通常、風光明媚な景勝地、特徴的な景觀を持つ名勝、歴史上有名な史跡、歴史的な人物や事件に關わる古跡などの基盤の上に、さらに文藝的な歴史を内在させて、著名な固有名詞として定着・流布することになる。

中國における地名の詩跡化の現象は、『詩經』や『楚辭』に端を發し、六朝期には早くも個々の詩跡が出現しはじめた。唐代は、詩跡が大量かつ系統的に形成された時代であり、續く宋代を通して、ある土地がある特定の詩歌との關連で認識されるという、詩跡の固定化が進展していく。とはいえ、政治の中心である都城の變遷、國土の廣域化等の新しい事態の出現によって、新たな詩跡が誕生している。そのなかには成熟度が不足し

て詩跡化の段階に止まるものもあるが、古典詩という言葉藝術は元明清期、依然として尊重され、熱心な作詩行為が廣範に存續して、新たな詩跡が誕生していった。

本稿では、元（金代を含む）・明・清朝期に發見された新しい詩跡、名山として醫巫閭山（遼寧省）・點蒼山（雲南省）・盤山（天津市）、湖水として滇池（雲南省）、井泉として薛濤井（四川省）、橋梁として盧溝橋（北京市）、樓閣として采石太白樓「謫仙樓」（安徽省）・濟寧太白樓（山東省）・晴川閣（湖北省）、寺觀として泉州開元寺・雙塔（福建省）、墳墓として于忠肅墓（浙江省）、邊境として烏魯木齊（新疆ウイグル自治區）・伊犁（新疆ウイグル自治區）、關隘として嘉峪關（甘肅省）・山海關（河北省）、合計一五項目を取りあげた。もちろん、元明清期に誕生した新しい詩跡は、このほかにも存在する。ただこれらの項目だけからでも、當地を詠みこんだ詩の創造的イメージに彩られた文學地誌（詩歌の地誌）上に登録された詩跡の廣がり、確實に見て取ることができよう。それは、必ずしも現實の風土や實際の景觀そのままではないが、ここには、旅せぬ人も、風土の本質的情感をとらえた作品を通して、旅情を味わえるという文藝世界が、確かに成立しているのである。

○元明清期に誕生した詩跡解説

【名山】

【醫巫閭山】

遼寧省北鎮市の西北五キロにある、遼寧を代表する名山の名。東北から西南方向に四五キロにわたって、五〇余りの峰々が連なり、主峰の望海山は海拔八六七メートル。『周禮』夏官司馬・職方氏の條に、「東北を幽州（九州の一）と曰い、其の山鎮を醫無閭（＝醫巫閭）と曰う」とあるように、醫巫閭山は古來、中國東北部の鎮守の山として、古來、祭祀の對象とされ、山下には金代創建の北鎮廟がある。醫巫閭とは、古代の東胡語の譯音で、大山の意という。略稱は閭山。六山・廣寧大山ともいう。千山・長白山とともに東北三大名山と呼ばれ、遼・金以來、寺院が建立されていく。

戰國・楚の屈原「遠遊」篇に、「朝に軻を太儀に發し、夕べに始めて於微閭に臨む」（朝、天帝のお庭から車で出發し、夕方になって、ようやく於微閭山を見下ろす上空に到達した）とある。この於微閭が醫巫閭山のこととされ、韻文中に見える古い用例となる。しかし「天涯」にある醫巫閭山の詩跡化はかなり遅れ、金の蔡珪（？——一七五）の七言古詩「醫巫閭山」が早期の作であり、醫巫閭山は高名な畫家さえも全貌を描きえない壯麗な山であるとたたえる。

幽州北鎮高且雄 幽州の北鎮 高くして且つ雄なり
倚天萬仞蟠天東 天に倚ること萬仞 天の東に蟠る
祖龍力驅不肯去 祖龍（秦始皇帝） 力もて驅るも 去るを

肯んぜず

至今鞭血余殷紅 今に至るも 鞭血 殷紅を余す
崩崖暗谷森雲樹 崩崖 暗谷 雲樹森え
蕭寺門橫入山路 蕭寺（佛寺） 門横たわりて 山路に入る
誰道營丘筆有神 誰か道う 營丘（宋初の山水畫家李成）
筆 神有りと

只得峰巒兩三處 只だ峰巒 兩三處を得るのみ
我方百里來天涯 我 方に百里 天涯に來れば
坡陁繚繞昏風沙 坡陁（起伏に富み）繚繞として 風沙に昏

直教眼界增明秀 直だ眼界をして明秀を増さしめば
好在嵐光日夕佳 好在にも 嵐光（もやのきらめき） 日夕
に佳なり

封龍山邊生處樂 封龍山（河北省の山）邊 生處樂しきも
此山之閒亦不惡 此の山の閒も 亦た惡しからず
他年南北兩生涯 他年 南北の兩生涯
不妨世有揚州鶴 妨げず 世に揚州の鶴有るを

終りの二句は、將來、北から南に至る名山を心ゆくまで遊覽したいという、作者の思いの表明であらう。また同じく蔡珪の七絶「閭山」詩は、山上からの眺望を歌う。

西風絕境撫孤松 西風の絶境（山頂） 孤松を撫で
千里川原四望通 千里の川原 四望通ず

但怪林梢看鳥背 但だ怪しむ 林梢 鳥背を見るを
 不知身到碧雲中 身 碧雲の中に到りしを知らず
 木々の梢にとまる鳥の背中が見える、という轉句は、山の高
 みにいることを暗示させる、斬新な表現である。

この蔡珪の二詩は、いずれも明の景泰七年（一四五六）に成
 る、明代最初の官修地理總志『寰宇通志』七七、續く天順五年
 （一四六一）に成る官修地理總志『大明一統志』二五の、醫巫
 閭山の條に、少なくとも部分的に引用されており、醫巫閭山を
 詩跡化する契機となった作品である。

續いて明・張鼎の五言古詩「醫巫閭山の絶頂に登る」詩も、
 この遼寧の靈山を歌う。ここでは、初めの六句のみをあげる。

神州五岳神所居 神州（中國）の五岳は 神（神仙）の居る
 所

遼西乃有醫巫閭 遼西には 乃ち醫巫閭有り
 長城不能斷地脈 長城も 地脈を斷つ能わず

靈氣盤結束扶余 靈氣は 東の扶余（遼寧・吉林の舊國の地）
 に盤結す

翠屏萬疊遮大漠 翠屏（緑色の障壁）萬疊 大漠を遮り
 危峰千尺凌清虛 危峰千尺 清虛（天空）を凌ぐ

清の康熙帝「廣寧（北鎮市）に過ぎりて醫巫閭山を望む」詩
 には、「名山 霄漢（天空）を插して、朶朶たる 青き芙蓉
 （一輪一輪、青い蓮の花が群がり咲くよう）」と歌いおこし、湯右

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

曾の雄篇「醫巫閭山」詩は、「舜 十有二山を封じ、此の山を
 以て幽州の鎮と爲す。是れより遂に北鎮と爲る」（『大明一統志』
 二五）という、悠久の靈山であることから説き起す。

虞封十二山 虞（舜） 十二山を封じ

醫巫閭鎮幽 醫巫閭は 幽（州）を鎮む

一重復一掩 一重 復た 一掩

秀色橫九州 秀色 九州（天下）に横たわる

他方、清初の陳廷敬の五言古詩「醫巫閭山登覽」詩は、山の
 名勝をめぐり訪ねるさまを、

我尋桃花洞 我 桃花洞を尋めるに

花源寒蕊遲 花源 寒蕊遅し

縹渺呂公巖 縹渺たり 呂公巖

遺蹟不可追 遺蹟は 追うべからず

云々と歌う。桃花洞は山上にあつて、「門の大きさ 輪の如く、
 其の中 五六人を容るべし」とされ、呂公巖は山下の北鎮廟内
 にあるという（『寰宇通志』七七、醫巫閭山）。詩中の呂公巖は、
 あるいは山中の仙人巖をいうのであろうか。神仙の雰囲気をつ
 たえて人を惹きつけるのである。

醫巫閭山は、東北の地が文化的に進展した金元以降、壯麗な
 靈山として再發見された詩跡なのである。

【點蒼山】

中國詩文論叢 第三十集

雲南省大理市の西北を、南北方向に約五〇キロにわたって、雄峻な十九の峰々が連なる山の名。平均海拔は三五〇〇メートル以上、主峰の馬龍峰は海拔四一二二メートルの高さである。

『大明一統志』八六、大理府、點蒼山の條にいう、「府城の西に在り。高さ千余仞、峰有り十九、蒼翠たること玉の如し。：又た瀑布・諸泉有り。流れ注ぎて錦浪等の十八川と爲る」と。

蒼山ともいう。元・明・清のとき、大理路・大理府の治所が置かれた太和縣は、現在の大理市の北にあり、西に峨峨たる雄壯な點蒼山、東に秀麗な洱海（大きな淡水湖）に夾まれた景勝地であった。明代の後期、萬曆三十七年（一六〇九）ごろに成る王圻・王思義編集『三才圖繪』地理十二卷にも、明の萬曆三十七年に刊行された楊爾曾輯『海内奇觀』一〇にも、點蒼山の圖と解説文を収めており、點蒼山の知名度が高まっていることを表している。この點蒼山の四絶（四大奇觀）と稱されるのは、雲・雪・峰・溪である。

點蒼山の詩跡化は、元の大徳五年（一二三〇）、雲南（の昭通市）に赴いて烏撒烏蒙道宣慰副使となった李京が、點蒼山と洱海に夾まれた大理の美しい風光を詠んだ七律「點蒼臨眺」詩に始まるだろう。

水繞青山山繞城 水は青山を繞り 山は城を繞る
萬家烟火一川明 萬家の烟火 一川明らかなり
鳥從雲母屏中過 鳥は雲母の屏中より過ぎ

魚在鮫人鏡裏行 魚は鮫人（人魚）の鏡裏に在りて行く

翡翠罽毼籠海氣 翡翠の罽毼 海氣籠い

梅檀樓閣殷秋聲 梅檀の樓閣 秋聲殷し

虎頭妙墨龍眠手 虎頭の妙墨 龍眠の手も

百幘生綃畫不成 百幘の生綃（白絹）に 畫けども成らず

頷聯は、鳥と魚の描寫を通して、切り立つ點蒼山と清澄な禰海を詠んだものである。罽毼は、ひさしや窓に設けた鳥よけの網をいう。最後の尾聯は、東晉の顧愷之（虎頭）、宋の李公麟（龍眠）のような卓越した畫家でさえも、點蒼山の美景を描き

出せないと歌って、點蒼山の壯麗さをたたえる。

明の『寰宇通志』一一一、大理府、「大理路に過ぎる」條に收める、「水は青山を繞り 山は雲（城？）を繞る」で始まる元の高昌雅の詩にも、きらめく清澄な洱海と壁立する緑の點蒼山の情景を對に仕立てて、

水光百頃開天鏡 水光百頃 天鏡を開き

山色四時環翠屏 山色四時 翠屏を環らす

と詠んでいる。

明初の邊昶の「點蒼山」詩は、蓮の花のように天空高くそそり立つ山容を、簡潔に説き盡くしている。

極目望點蒼 目を極めて 點蒼を望めば
芙蓉倚天闕 芙蓉 天闕（天上の宮殿）に倚る
下有百尺松 下に百尺の松有り

上有千年雪 上に千年の雪有り

他方、明の前期、雲南提學となった童軒「點蒼山」詩は、壯麗な山容を、

點蒼山色何奇哉 點蒼の山色 何ぞ奇なるかな

芙蓉朶朶天邊開 芙蓉 朶朶として 天邊に開く

嶙峋直上九千仞 嶙峋りんしゅんとして直ちに上ること 九千仞

俯視群岫皆蓓蕾 群岫を俯視すれば 皆な蓓蕾はいらい

云々と描く。蓓蕾は、花のつぼみの意。

續いて雲南出身の張含も、翠峰・晴雪の美、深山の靈異、溪流の清澄を稱賛した、五律「點蒼山」詩を作っている。

峒嶢侵碧漢 峒嶢ちようぎやう（高峻）として 碧漢（天空）を侵し

翠色欲浮城 翠色 （大理の）城を浮かべんと欲す

霽雪經年在 霽雪 年を経て在り

愁雲向晚生 愁雲 晩に向いて生ず

洞深龍或臥 洞深くして 龍或いは臥し

松老鶴長鳴 松老いて 鶴長に鳴く

十八溪中水 十八 溪中の水

寒流可濯纓 寒流 纓（冠のひも）を濯うべし

尾聯に見える「十八溪」とは、蒼山十九峰のそれぞれの峰の間から、激しい勢いで流れ下って、東の洱海へと注ぐ溪流を指し、滄浪水を思わせる清澄さであると讃えている。

また、雲南の出身である明末清初の擔當（釋普荷）は、五律

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

「點蒼山」のなかで、年中消えぬ白雪、いわゆる「蒼山の雪」を戴く山容を、

到此無冬夏 此に到れば 冬夏無く

峰峰一片氷 峰峰は 一片の水

と歌い、五絶「點蒼の吟」では、

十九盡撐天 十九 盡く天を撐え

峰峰皆可憐 峰峰 皆な憐れむべし

と詠んで、山への愛着を歌う。

點蒼山は元明以降、大理の西に連なる名峰として詠まれ續けたが、邊境の地の制約を受け、詩跡としては大きく成長できなかったのである。⁽³⁾

【盤山】

天津市薊縣城の西北約十二キロ、北京市の東約八〇キロのところにあり、「京東第一山」（北京の東の第一の名山）と稱される。古くは龍盤山・四正山・徐無山ともいう。主峰の挂月峰（海拔八五六メートル）・紫蓋峰などの五峰（平均海拔五〇〇メートル）からなり、かつて七二の寺觀があったという。また、山上（上盤）の松、中腹（中盤）の石、山麓（下盤）の水の「三盤の勝」に富み、なかでも懸空石・搖動石などと呼ばれる八つの奇岩「八石」は有名である。明の蔣一葵『長安客話』五、畿輔雜記、盤山の條にいう、「山は盤旋する（険しい峰を、ぐるぐ

中國詩文論叢 第三十集

るめぐりながら登りゆく」を以て名を得たり。亦た龍盤山と云う。最も高き者を上盤と爲し、稍卑き者を中盤と爲す。泉多く松多し。最も怪特多き者は石。石は皆な下に鋭くして上に豊かなり。故に多く飛動し、山中の人は齒頰に津津たり（おもしろそうに語る）」と。

清の釋德意（後述する釋智朴の弟子）は、詩「山中口占」（山中にて口占す「即興で作る」）を作って、盤山の幽邃な魅力を詠む。

山秀石多怪 山秀でて 石は怪多く

林深路轉奇 林深くして 路轉た奇なり

三盤無限意 三盤 無限の意

幽絕少人知 幽絶 人の知ること少なり

盤山は、都城が北京に置かれた明代以降、都城近郊の名山として多くの詩人が訪れて探勝し、その絶景を詠み始めた。明の謝榛（後七子の一人、一四九〇～一五七九）は、七言古詩「盤山の絶頂に登りて黃龍祖師の祠に謁す」詩の中で、

薊北來遊第一山 薊北に來遊す 第一の山

上連七十二禪關 上には連なる 七十二の禪關（寺院）

人行巨壑泉聲裏 人は行く 巨壑（大きな谷） 泉聲の裏

馬度曾崖雲氣間 馬は度る 曾崖（重なり合う絶壁） 雲氣の間

石徑蕭蕭風吹冷 石徑は 蕭蕭として 風吹いて冷やかに

萬折千廻臨絶頂 萬折千廻して 絶頂に臨む（到る）
鐘響時傳下界遙 鐘響いて 時に傳う 下界の遙かなるに
鳥飛不到諸天迴 鳥飛ぶも 到らず 諸天（天界）の廻かなるに

無勞漢使泛槎心 漢使 槎を泛ぶるの心を勞する無し
揮手銀河能幾尋 手を揮れば 銀河は能く幾尋ぞ

と歌う。漢使云々は、漢の使者・張騫が筏を浮かべて河を遡り、天上の銀河に行き着いた、という有名な傳承を踏まえて、絶頂に登れば、勞せずして銀河にとどきそうだと、盤山の高峻さを強調したものである。

明の王世貞（後七子の一人、一五二六～一五七九）も盤山に登って、七律「盤山」二首を作り、其二には獨特の風景を多角的に描寫して、大自然の美を表現する。

千盤歷盡更茫然 千盤（曲折する山道）歷盡して 更に茫然
回首中原暝色前 首を中原に回らす 暝色（暮色）の前
峽轉琳宮藏皓月 峽（谷）は琳宮（寺觀）を轉して 皓月を藏し

峰排紫劍插遙天 峰は紫劍を排べて 遙天を插す
雲根檜坼龍鱗起 雲根（山巖）檜坼けて 龍鱗起こり
磴道泉歸玉乳懸 磴道（石段） 泉歸いて 玉乳（白乳）懸かる

深夜不須驚鼓吹 深夜 鼓吹（蛙聲）に驚くを須いず

看予箕坐嘯風烟 看よ 予が 箕坐して 風烟に嘯くを

頸聯は、深山の岩に生えるイブキ（ヒノキ科の常緑高木）が、長い歳月を経てささくれ立っている樹の肌、石段のほとりに白いしぶきをあげて落ちる瀧の描寫であろう。箕坐は、兩足を前に出して廣げる、氣ままな坐りかたである。

名將・戚繼光（一五二八―一五八七）は、穆宗の隆慶二年（一五六八）、都督同知總理薊州昌平保定三鎮練兵事に任じられて以降、十五年間ほど、北邊の防備の強化に當たった。その頃の作であろう。七律「盤山の絶頂に登る」詩の中央一聯にいう。

朔風邊酒不成醉 朔風 邊酒（邊地の酒） 酔いを成さず

落葉歸鴉無數來 落葉 歸鴉 無數に來る

但使雕戈銷殺氣 但だ雕戈（武器）をして殺氣を銷さしめば

未妨白髮老邊才 未だ妨げず 白髮 邊（地）に老ゆる才なるに

後聯は、將軍らしい悲壯な決意の表明である。戦い續けて外敵の侵犯を制止できさえすれば、このまま邊境を防備して年老いてしまってもかまわない、と。

明の袁宏道（一五六八―一六一〇）は、「盤山に入る」詩の中で、蚪がとぐろを巻くかのように枝を伸ばす老松の林と、根や蒂のような支えもなく、空中にへばりつく奇岩を詠んでいう。

蚪松百萬株 蚪松 百萬株

粘石無根蒂 粘石 根蒂無し

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

清の康熙四五年（一七〇六）の康熙帝（愛新覺羅玄燁）自序を有する張玉書ら奉敕撰『佩文齋詠物詩選』は、漢魏から明代に到る詠物詩一萬四千六九〇首を四八六類に分けて收録する、現存最大の詠物詩集であるが、その中に獨立した項目「盤山類」が設けられ、明代の王嘉謨の「盤山」「盤山の雙峰寺」、前掲の謝榛の詩、蕭應鳳の「盤山の絶頂に登る」、王衡の「盤山に遊ぶ」二首、高承埏の「盤山を望む」の合計七首を収めている。これは、盤山が明代に詩跡として確立したことを表している。

清初、盤山には、康熙十年（一六七二）、盤谷寺を開いた詩僧・智朴が住み、當時の著名な王士禎・朱彝尊・洪昇・宋荦らが、しばしば盤山を訪れ、交流して詩を作った。釋智朴が盤山に關する最初の百科事典『盤山志』（康熙三五年「二六九六」序刊）十卷、補遺四卷を編纂したとき、王士禎と朱彝尊が校訂に當たっている。智朴と交流した一人で、戯曲に優れた洪昇（一六四五―一七〇四）の六言詩「登挂月峰寄朱竹垞檢討」（挂月峰に登りて、朱竹垞「朱彝尊」檢討に寄す）には、探勝の名山として歌われている。

五峰各各競秀 五峰 各各 秀を競い

挂月一峰獨尊 挂月の一峰 獨り尊し

仰視浮圖天近 仰いで浮圖（佛塔）を視れば 天近く

俯窺下界塵翻 俯して下界を窺えば 塵翻る

薊遼故國東鎮 薊遼は 故國（祖國）の東鎮

中國詩文論叢 第二十集

山海中原北門 山海（關）は 中原の北門

恨不携君共眺 恨むらくは 君を携えて共に眺めざるを

臨風長嘯雲根 風に臨んで 雲根に長嘯す（岩の上で伸びや

かに詠歌する）

盤山で最も高い挂月峰の頂、いわゆる盤頂には、唐代、智源禪師の建てた、八角三層の定光佛舍利塔（盤塔）があった。第三句の浮圖は、これを指している。

清代、盤山は滿洲族の祖廟のある盛京（遼寧省瀋陽市）へ往復する途上にあったため、清朝の皇族たちは、盤山の景勝に引かれて、しばしばこの山に立ちよった。清初の康熙帝（二六六二～一七二二在位）は、四度訪れ、十首を超す詩を残している。五絶「清晨入盤山二首」（清晨に盤山に入る二首）にいう。

○日出入盤山 日出でて 盤山に入る

宸遊草木閑 宸遊（行幸） 草木閑かなり

村莊人盡觀 村莊（村落） 人盡く觀

處處水潺潺 處處 水潺潺たり （其一）

○當年乘輦到 當年 輦（御車）に乗りて到る

今日復來遊 今日 復た來遊す

山水不同色 山水は 色を同じゅうせざるも

泉聲還細流 泉聲は 還お細く流る （其二）

とりわけ乾隆帝（愛新覺羅弘曆、一七三六～一七九五在位）は、南麓に廣大な離宮「靜寄山莊」を建て、さらには蔣溥らに命じ

て『盤山志』二二卷（乾隆二十年「一七五五」の乾隆帝の序）を編纂させるなど、盤山との関わりが深い。

盤山は明清期、都城近郊の名山として、急速に發展した詩跡なのである。

【湖水】

【滇池】

中國西南端の高原にある雲南省の省都・昆明市の、西南郊外に廣がる大きな淡水湖（中國第六大淡水湖）。面積は約三〇〇平方キロ（南北四〇キロ、東西の平均約一〇キロ）、水面海拔約一八〇〇メートルである。滇池の名は、古くは『史記』一一六、西南夷列傳に見え、その大きさを「方三百里」と記す。明・楊慎の「滇海曲十二首」其八の、「昆明池水 三百里、汀花 海藻 十洲（仙島）連なる」は、これを踏まえていよう。後世では「周廣五百余里」（『大明一統志』八六など）と記される。滇池澤・滇南澤・昆明池・昆明湖・滇海などともいう。滇海の呼稱は比較的新しく、邊境の大きな湖を「海」と呼ぶ例になっただものである。滇も昆明も、元來、當地に住んだ部族（西南夷）の名である。

雲南は、古くはさまざまな少數民族が、峻險な地勢に割據した「蠻地」であった。唐代には南詔國、宋代には大理國が獨立王國を築いた。元朝が雲南一帯を制壓すると、雲南は中央の支

配下に入り、明・清の二代、昆明は雲南府の首府となる。かくして漢族が多く移住して、急速に漢化が進んだ。ただ雲南は、明清期を通じて流謫の地でもあった。

元の大徳五年（一三〇一）、烏撒烏蒙道宣慰副使となって雲南（昭通市）に赴いた李京は、七律「初めて滇池に到る」詩を作るが、滇池そのものにはほとんど言及しない。このため、雲南昆明の名勝・滇池の詩跡化は、明初の洪武三年（一三八〇）、日本や北元と内通して謀反を企てたという胡惟庸の事件のおおききを受けて、雲南の昆明に配流された日本の僧・機先が、月夜の舟遊びを詠んだ清麗な七律「滇池夜月」（滇池の夜月）に始まる、といつてよいだろう。遙か昔、謝靈運が永嘉で舟に乗って海邊めぐりをした楽しさ、蘇軾が赤壁に舟を浮かべて月夜を楽しんだことを思いうかべながら、配流の憂さを忘れて、しばし詩作に没頭したと歌う。

滇池有客夜乘舟 滇池に客有り 夜 舟に乗れば
渺渺金波接素秋 渺渺たる金波 素秋（秋の天空）に接す
白月隨人相上下 白月（輝く月） 人に随いて相い上下し
青天在水與沈浮 青天 水に在りて（映って） 與に沈浮す
遙憐謝客滄洲趣 遙かに憐む 謝客（謝靈運） 滄洲の趣
更愛蘇生赤壁遊 更に愛す 蘇生（蘇軾） 赤壁の遊び
坐依蓬窓吟到曉 坐るに蓬窓（船窓）に依りて 吟じて曉に
到れば

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

不知身尙在南州 知らず 身は尙お南州（南國）に在るを
本詩は、明の沐昂編『滄海遺珠』四に収める、「滇陽六景」のうちの一首（他の五首は金馬朝暉・碧鷄秋色・玉案晴嵐・龍池躍金・螺峰擁翠）である。

滇池が詩跡として確立するのは、詩才に富む楊慎（一四八八～一五五九）が昆明を中心とする雲南の情景を多角的に詠んだ七言絶句の組詩、「滇海曲十二首」⁽⁵⁾「滇海竹枝詞二首」などによるだろう。

楊慎は、嘉靖三年（一五二四）、三七歳のとき、朝政を揺るがした「大禮の議」で世宗（嘉靖帝）の逆鱗に觸れて雲南の永昌（現・保山市）に左遷された。以後赦免されずに、約三五年間に及ぶ後半生を雲南の地で過ごし、七十二歳のとき永昌で没した。嘉靖二〇年代の後半には、滇池の西北岸に臨む高嶠山^{こうきやう}の麓にある、毛氏の別荘内に設けられた碧嶠精舍で著述や講學に勵んだ。嘉靖二八年（一五四九）六二歳のときには、しばしば滇池に遊んでいる。雲南の雄麗な山水と特有の風物を詠んで、詩跡として定着させた楊慎の功績は、きわめて大きい。

楊慎は「昆陽（滇池の南岸近くの昆陽州〔現・昆明市晉寧縣〕にて海を望む」詩のなかで、「昆明（湖）の波濤 南紀（南國）の雄、金碧滉漾して 銀河と通ず」とたたえる。さらに「滇海曲十二首」其十には、氣候溫暖な滇池の、のどかで美しい風光を歌う。

中國詩文論叢 第二十集

蘋香波暖泛雲津 蘋香しく 波暖かにして 雲津に泛べば

漁樵樵歌曲水濱 漁樵ぎよえい樵歌す 曲水の濱

天氣常如二三月 天氣は 常に二三月のごとく

花枝不斷四時春 花枝斷えずして 四時春なり

―雲津橋（かつて盤龍江が昆明城を貫いて滇池に注ぐところにあつた橋）から乗船して滇池に浮かべば、浮き草が芳しくにおい、波は暖か。入り組んだ水邊には、樵かいを鳴らしてこぎゆく漁師の歌や、木こりの歌聲が響きわたる。天候はいつも二三月（仲春・晩春）のよう。枝先には花が斷えることはなく、一年中、うらかな春の氣はい。―

楊慎はまた、七絶「春望三首」其二のなかで、風・樹・花・水を通して、滇池の美しい春色を描き出している。

滇海風多不起沙 滇海 風多きも 沙（沙塵）を起こさず

汀洲新綠遍天涯 汀洲（水邊の沙地）の新緑 天涯に遍し

采芳亦有江南意 芳はなを采れば 亦た江南の意有り

十里春波遠泛花 十里の春波 遠く花（小さな泡の花）を泛ぶ

轉句は、南朝・梁・陳えん「江南の曲」の「汀洲に白蘋（白い浮き草）を采れば、日は落つ 江南の春」を踏まえて、江南の春の風情を思い浮かべさせるさまをいう。

滇池は、日本の僧・機先きせんに詠まれ、楊慎が詠みついて、文學地誌上に登録された詩跡といえよう。以後も、清の陸藝「昆明

池に泛ぶ」詩などの作もある。⁽⁶⁾

【井泉】

【薛濤井】

唐の成都の樂妓、薛濤（？～八三三）は、「春望詞」四首などの名作を持つ女流詩人である。彼女は、劍南西川節度使・韋皋に寵愛され、後に樂籍を離れて、成都の西郊、浣花溪（錦江の上流）の百花潭のほとりに移り住み、晩年は成都城内西北隅の碧鷄坊に吟詩樓を建てて住んだという。薛濤は當時の著名な詩人、白居易や元稹などと詩の贈答がある。

好んで「小詩」（絶句）を創った薛濤は、從來の詩箋は幅も長さも大きすぎるとして、小さな深紅の詩箋を考案して作らせた。その美しい詩箋のうえに、みずから流麗な行書で自作の詩を書いて、唱和する相手に贈った。かくして好評を博し、「薛濤箋」（浣花箋）と呼ばれて、歴代、成都の名産になる。晩唐の李商隱の句「浣花の箋紙 桃花の色」（「送崔珣往西川」詩）は、この薛濤箋を詠んだものである。

薛濤井とは、彼女が詩箋を漉く際に用いる水を汲んだ井戸とされ、四川省成都市の東南、錦江に臨む望江樓公園内にある。薛濤箋は本来、浣花箋の別名があるように、箋紙の生産地である成都の西郊、浣花溪で造られていた。しかし明代の蜀王府が、清冽な水を出す現在の井戸水（玉女津泉）で薛濤箋を作ったの

で、井戸は俗に薛濤井の名で呼ばれ、ほどなく薛濤ゆかりの井戸と考えられるようになった。清の康熙三年（一六六四）には、成都知府・冀應熊が「薛濤井」碑を井戸のそばに建てている。

この薛濤井は明らかに誤傳にもとづくが、明代の後期から王士性・楊一鵬・戴燦らが詩に詠みはじめて、詩跡化した。「薛濤箋を染むる爲に、來りて薛濤井を見る」で始まる萬曆年間の王士性「薛濤井」詩は、在りし日の薛濤をしのんで、こう結ぶ。

嬋娟今寂寞 嬋娟（清楚な美女）は 今寂寞たり

淚落滿欄杆 淚落ちて 欄杆に満つ

また、明末の戴燦の七絶「薛濤井」詩にいう、

寒泉翠篠午陰清 寒泉 翠篠 午陰清らかに

讀罷殘碑感慨生 殘碑を讀み罷りて 感慨生ず

不見玉顏窺照影 見ず 玉顏の 照影を窺うを

空餘金井輾轡聲 空しく餘す 金井 輾轡の聲

照影は井戸水に映る自らの姿を指し、輾轡の聲は、紙漉のために水を汲み上げる滑車の音をいう。

薛濤井は、その後も、清の張琯・吳省欽らに詠みつがれていく。彭芸蓀『望江樓志』（四川人民出版社、一九八〇年）張蓬舟

『薛濤詩箋』（人民文學出版社、一九八三年）には、明清間の薛濤井を詠んだ二十首前後の詩を収めている。

薛濤井のそばには清代の中期、吟詩樓と浣箋亭、清末に崇麗閣（望江樓）が建てられた。薛濤井は誤傳が生んだものである

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

が、虚實を越えて、明清期、女流詩人薛濤をしのぶ詩跡となったのである。

【橋 梁】

【盧溝橋】

北京市の西南約一五キロメートル、豐臺區を流れる永定河（舊稱・盧溝河）に架かるアーチ形の石橋の名。盧溝橋とも書く。

流れの急な濁流―盧溝河には、古くは木橋や浮橋が架けられていた。女真族の金の都城・中都が北京に置かれると、盧溝橋は南方から都城に到る公道上の要衝となり、浮橋等では重大な支障が生じた。かくして金の大定二年（一一八九）、石橋の建設に着手して、明昌三年（一一九二）に完成した。正式には廣利橋と命名されたが、盧溝河（渾河・黒水河ともいう。桑乾河の下流部にあたり、康熙三十七年「一六九七」、現在の永定河の名を賜る）に架けられた橋であるため、盧溝橋と呼ばれて、金・元・明・清期、都城に出入する要衝として存続した。修築を経た、現存の石橋は、全長二六六・五メートル、幅七・五メートル、下部には十一のアーチ式橋脚（橋孔）がある。マルコ・ポーロが、雲南への使節行（一二八〇年代ごろ）の初めに見た盧溝橋は、「全く世界中どこを捜しても匹敵するものはないほどのみごとさ」（愛宕松男譯注『東方見聞録』一、平凡社、一九七〇

中國詩文論叢 第三十集

年)であつたという。當時の橋の形態については、王旭の詩「至元二十二年(一二八五)九月二十五日、早に燕南の盧溝橋を過ぐ」のなかに、「鰲背の橋は高く、馬蹄滑らかなり」と表現されている。鰲背(オオウミガメの背中)とは、そのあるせり上がった特異な橋形をしていたことをいう。

金の趙秉文(一一五九〜一二三三)が最も早い時期、石橋の盧溝橋を詠む。彼の七絶「盧溝」詩の後半にいう。

落日盧溝溝上柳 落日 盧溝 溝上の柳

送人幾度出京華 人を送りて 幾度か 京華を出づる

京華とは金の都城・中都を指す。都城から南に赴く交通の要衝に位置した盧溝橋は、送別の場所でもあつたのである。

盧溝橋における有明の月(曉月)は特に有名な景物であり、金元以來のいわゆる「燕京八景」(燕山八景・京師八景)の一つ、「盧溝の曉月」として知られる。明の王圻・王思義編集『三才圖繪』地理六卷には、「早ごとに、波光・曉月、上下に蕩漾し、曙景(夜明けの景色)は蒼然として一奇なり。京師八景の一つ爲り、名づけて盧溝の曉月と曰う」とある。

元初の尹廷高「盧溝曉月」(盧溝の曉月)詩は、「盧溝曉月」と題した詩としては早期の作であり、曉月が空にかかり、白い霜が降り、鶏が時を告げはじめた、まだ暗い秋の夜明け、盧溝橋を旅立つ情景をモチーフとする。

闌干浣漾晨霜薄 闌干 浣漾として 晨霜薄く

馬度石橋人未覺 馬 石橋を度りて 人未だ覺めず

滔滔流水去無聲 滔滔たる流水 去りて聲無く

月輪正挂天西角 月輪 正に挂かる 天の西角

千村萬落荒鷄鳴 千村萬落 荒鷄鳴き

大車小車相間行 大車小車 相い間りて行く

停鞭立盡楊柳影 鞭を停めて立ち盡くす 楊柳の影

孤鴻滅沒青山橫 孤鴻滅沒して 青山横たわる

その後、盧溝の曉月は元の陳孚、明の王綬・王洪・楊榮・李東陽らに詠まれ、詩跡「盧溝橋」の代表的景物となった。清の乾隆一六年(一七五二)、四一歳のときに成る乾隆帝(愛新覺羅弘曆)の七律「盧溝曉月」(盧溝の曉月)詩は、詩跡としての盧溝橋を決定づけた作と評してよいだろう。題下の序にいう、「盧溝河は即ち桑乾河なり。水黒きを盧と曰う。故に以て之に名づく。橋は金の明昌(章宗の年號)の初めに建つ。長さは二百余歩、陸程由り京師に入る者は、必ず道を此に取る」と。

茆店寒鷄咿啞鳴 茆店の寒鷄 咿啞として鳴き

曙光斜漢欲參橫 曙光 斜漢 參横たわらんと欲す

半鉤留照三秋澹 半鉤 照を留めて 三秋澹く

一綵分波夾鏡明 一綵 波を分かち 鏡を夾んで明らかなり

入定衲僧心共印 定に入る衲僧は 心共に印せしも

憶程客子影猶驚 程を憶う客子は 影猶お驚く

邇來每踏溝西道 邇來 溝西の道を踏む毎に

觸景那忘黯爾情 景に觸れて 那ぞ忘れん 黯爾たる情を

―茅ぶきの旅籠の鶏が暗いうちから時を告げて鳴き、白みそめた東の空に、天の川が西に傾き、參宿サリオンが低く沈みかけている。

鉤形の半月はまだ光を留めて、淡い秋の氣はいがただよい、ひとすじの虹のような橋が川波を分けて、澄んだ鏡のごとき水面を明るくさしはさむ。瞑想に入った禪僧は、月と心を深く通い合わせられようが、道のりを思う旅人は、(曉月に照らされてうつる)橋上のわが影に、はっと心を驚かせる。近ごろ盧溝橋の西の道に踏み出すといつも、こうした風景に接して、くらぐらと沈みゆく別れの悲しみを忘れかねるのだ。――

本詩は、橋邊に御筆の石碑が現存する。

清の王鳴盛「盧溝橋」詩は、「盧溝曉月」とは題していないが、〈盧溝曉月早行〉のイメージを繼承する。

臥虹終古枕桑乾 臥虹 終古 桑乾を枕とし

決渰渾河走急湍 決渰けつもん 渾河 急湍を走らす

馬邑風煙通一線 馬邑 風煙 一線を通じ

太行紫翠壓千盤 太行 紫翠 千盤に壓む

喚人啜啜荒鷄早 人を喚びて 啜啜として 荒鷄早く

照影蒼蒼曉色寒 影を照らして 蒼蒼として 曉色寒し

沙際閑鷗應笑我 沙際の閑鷗 應に我を笑うべし

又聽鈴鐸送征鞍 又た鈴鐸を聽いて 征鞍を送る

―盧溝橋は、とこしえに桑乾河(＝永定河「盧溝河」)を枕にし

元明清期に誕生した詩跡初探(植木)

て、虹のように横臥する。橋下には、水量豊かな渾河(＝永定河)が激流となって過ぎゆく。この川は、遠く風と靄のかなた、(山西省の)馬邑城まで、ひとすじに結び、紫の山氣に包まれた太行山が、たたなわる峰々に迫りくる。まだ暗いうちから鶏が時を告げて旅立つ人を呼び覺まし、月の光に照らされて、未明の空は寒々と青白い。みぎわにのどかに憩う白鷗(水鳥)は、きっと私のことを笑っていることだろう。またも旅立つ馬の鈴音に耳を傾けつつ、旅路にのぼる人を見送る私のことを。――

第四句は、盧溝橋の西方にある西山が、太行山の余脈に屬していたことを詠む。

ちなみに、盧溝橋の兩側の欄干には、石の獅子像が多く彫られていた。現存のものは明の正統九年(一四四四)、橋が改修された際に造られ、数は大小あわせて五〇〇弱という。明の徐渭「燕京(北京)より馬水に至る、竹枝詞、二首」其二は、盧溝橋のシンボルである獅子を、こう詠んでいる。

流出盧溝成大鏡 流れ出づる盧溝は 大鏡と成り

石橋獅影浸拳毛 石橋の獅影は 拳毛(卷き毛)を浸す

盧溝橋は、北京に都城が置かれた金元以降、西南郊外の交通幹線にある、早朝の旅立ちの場所として確立した詩跡なのである。

【樓閣】

【采石太白樓（謫仙樓）】

唐の詩人李白（字太白）を記念する太白樓は、長江に面する安徽省馬鞍山市の采石磯にあり、前の太白樓主樓、後の太白祠から成る。太白樓大門の門額には「唐李公青蓮祠」とある。明の正統五年（一四四〇）、巡撫・侍郎の周忱は、長江に臨む采石（磯）に謫仙樓を建てた（『大明一統志』一五、太平府）。李白は采石磯の江中に舟を浮かべ、酒に酔って水面に映る月を捉えようとして溺死したという。この水中捉月溺死傳説（のちには變化して、鯨に騎って天空に昇ったという水中捉月昇仙傳説）で知られる場所が、この采石磯である。采石磯の謫仙樓には李白の遺像が祀られ、謫仙祠・太白祠とも呼ばれたらしい。樓上からの眺望は雄大をきわめて、登覽の名勝となる。謫仙樓は、清の康熙元年（一六六二）に再建された際、「太白樓」と改名されている。現存の太白樓は、光緒三年（一八七七）の再建であり、江西の滕王閣、湖北の黃鶴樓、湖南の岳陽樓と併せて、長江の三樓一閣と稱される。

謫仙樓、後の太白樓は、明代の創建以降、ほどなく李白をしるぶ場所として詩跡化する。明の李東陽は、「采石にて謫仙樓に登る」詩の末尾で、

鳳去龍飛不復還 鳳去り 龍飛びて 復た還らず

仗劍悲歌竟何益 劍に仗り 悲歌して 竟に何の益かあらんと詠じて、李白無き世界を嘆く。明の邵寶「采石にて謫仙樓に

登る」詩も傳わる。謫仙樓がすでに遊覽の名所となっていたことは、童軒の詩「舟回采石、夜泊謫仙樓下、值雨弗果登樓、用賦一詩以弔」（舟にて采石に回り、夜 謫仙樓下に泊し、雨に値いて登樓を果たさず、用て一詩を賦して以て弔う）にも窺われる。この七絶詩にいう。

謫仙樓下弔詩仙 謫仙樓下に 詩仙（李白）を弔う

千載風流世共憐 千載の風流 世共に憐む

煙雨一江無月色 煙雨 一江 月色無く

鯨魚風起浪花圓 鯨魚 風起こりて 浪の花圓なみだかなり

王世貞の「采石にて太白祠に謁す」詩もあり、さらに余翔の七絶「采石秋夜」（采石「磯」の秋夜）には、こう詠まれている。

秋色西來采石高 秋色西來して 采石高く

謫仙祠下水滔滔 謫仙祠下 水滔滔たり

嬋娟一片澄江月 嬋娟せんだいたる一片 澄江の月

曾照當年宮錦袍 曾て照らす 當年の宮錦袍

結句の宮錦袍とは、水中捉月の際、李白が身につけていたという、宮中で着用する禮装用の錦の上着をいう。

采石の太白樓は、清代になっても詠みつがれ、王士禛「太白祠」詩のほか、施閏章の次のような五律「太白祠」もある。

太白騎鯨去 太白 鯨に騎りて去り

空留采石祠 空しく留む 采石の祠

當軒千里水 軒に當たる 千里の水

繞屋萬松枝 屋を繞る 萬松の枝

山月長清夜 山月 長えに清らかなる夜

江雲無盡時 江雲 盡くるの時無し

誰將一尊酒 誰か一尊の酒を將て

把臂共論詩 臂を把りて 共に詩を論ぜん

采石磯にある謫仙樓・謫仙祠、太白祠・太白樓は、水中捉月（昇天）終焉傳説を思い浮かべながら、詩仙李白をしのぶ詩跡なのである。

【濟寧太白樓】

唐の詩人李白（字太白）が兗州任城縣（山東省濟寧市）に遊んだとき、酒を飲んだ酒樓を記念する高樓の名。濟寧市の中心街、古運河の北岸（古槐街道・太白中路）にある。古くは李白酒樓と呼ばれ、のちに李太白酒樓・太白樓などと呼ばれた。

『太平廣記』二〇一に引く晚唐・孟棨の『本事詩』には、「初め（李）白は幼より酒を好み、兗州に於て（學）業を習うに、平居（日ごろ）多飲す。又た任城縣に於て酒樓を構え、日に同志と其の上に荒宴し（仲間と酒宴にふけりおぼれ）、客至るも醒むる時有ること少し」という。これによれば、任城縣の酒樓は李白自身の建造となる。

他方、晚唐期、任城縣には李白が酒を飲んだと傳える、老朽化した小樓が存在した。咸通二年（八六一）、任城縣に立ち寄っ

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

た沈光の「李白酒樓記」（『唐文粹』七四）に、「齊魯の、結構雲を凌ぐ者に至っては、限り有り。獨り斯の樓や、廣さは數席を逾えず、瓦は缺け椽は蠹む。樵兒・牧豎（牧童）と雖も、過ぎて亦た之を指して曰く、『李白は常て此に酔う』と」とある。このとき、沈光は「李白酒樓」の扁額を書いたという。

太白酒樓は、元代に再建されたが、明の洪武二十四年（一三九二）、現在地（濟寧市）の、南城門の上に場所を移して再建され、きわめて眺望に富む。現存の建物は一九五二年、古い城壁の上に再建されたものである。

濟寧の太白樓の詩跡化は遅れて、再建された元の時代に始まる。元・趙孟頫の「李太白酒樓」（李太白の酒樓）詩にいう。

城迴當平野 城迴かにして 平野に當たり

樓高屬暮陰 樓高くして 暮陰に屬す

謫仙何俊逸 謫仙 何ぞ俊逸なる

此地昔登臨 此の地 昔 登臨せり

慷慨空懷古 慷慨して 空しく懷古し

徘徊獨賞心 徘徊して 獨り賞心す

嶧山明望眼 嶧山 望眼に明らかにして

百里見遙岑 百里 遙岑を見る

―城壁は平野の中に遙かに連なり、高樓はたそがれの闇に包まれる。謫仙李白は、何と才氣にあふれた人物だったことか。かつてこの高樓に登って眺望したのだ。空しく遠い昔をしのんで、

中國詩文論叢 第三十集

心は高ぶり、ひとり風景を愛でつつ、樓上をめぐり歩く。眺めやる眼に鮮やかに映る嶧山の姿、百里の彼方まで遠い峰々が見えている。――

謫仙とは、天上界からこの世に流された仙人の意。賀知章が李白を「謫仙人」と呼んだことにちなむ呼稱である。また嶧山は、濟寧市の遙か東方、鄒城市の東南にある名山である。元の趙文輝の「太白酒樓に登る」詩も傳わる。

明初の劉基「濟州（濟寧）の太白樓」詩には、「小逕（小道）行客を迂らせ、危樓（高樓）酒星（酒仙李白）舍る」とある。著名な詩人、王世貞は嘉靖三十二年（一五五三）、二八歳の秋に訪れて、五律「登太白樓」（太白樓に登る）詩を作り、李白を敬慕する心情を詠む。

昔聞李供奉 昔聞く 李供奉

長嘯獨登樓 長嘯して 獨り樓に登るを

此地一垂顧 此の地 一たび垂顧して

高名百代留 高名 百代に留まる

白雲海色曙 白雲 海色曙け

明月天門秋 明月 天門秋なり

欲覓重來者 重ねて来る者を覓めんと欲すれば

潺湲濟水流 潺湲として 濟水流る

――かつて耳にした、翰林供奉李白が、のびやかに吟詠しながら、ひとりこの高樓に登ったと。李白がこの場所に目をかけてより、

樓の名は百代のちまで傳わることとなった。白くかがやく雲の彼方、東の海は夜明けを迎えようとしており、明るい月の光をあびて、天門（泰山の頂上付近の南天門）は秋の氣はいを漂わせる。李白に續く者を求めたいと思っても、さらさらと水音を立てて、濟水が流れゆくばかり。――

明代、濟寧の太白樓は、かなり有名であった。明の王圻・王義集編『三才圖繪』地理八卷には、太白樓圖を収めて、太白樓は濟寧の州城に在り。濟・汶（の二水）環遶し、沃野漫衍し、帆檣上下し、樓閣掩映して、頗る登眺に稱う。昔、賀知章令（縣知事）たりし時、李白之に過ぎりて、酒を此に飲む。故に名づく。

という。賀知章云々の説明は、一種の傳承である。

清初の王士禛は、「雨中 太白樓に登る」詩のなかで、

開元陳迹去悠悠 開元（玄宗の年號）の陳迹は 去りて悠悠

たるも

猶有城南舊酒樓 猶お城南 舊き酒樓有り

吳語曾呼狂太白 吳語もて曾て呼ぶ 狂太白と

洛陽何必董糟丘 洛陽 何ぞ必ずしも董糟丘ならんや

と歌う。李白を「謫仙人」と呼んだ賀知章は、吳語（吳の方言）を話したと傳える。また董糟丘とは、唐の東都洛陽の天津橋の

南に、李白のために造られた酒樓の主人を指す。

また王士禛と面識のあった趙執信にも、「高樓 勢い泰岱

（泰山）と平らかなり、樓邊 夜夜 長庚（太白星）輝く」で始まる長篇の難言古詩「太白酒樓歌」があり、「任城 地好くして 水木に富み、高きに憑^はつて縦いままに飲めば 神嶢^{しんせう}嶢たり（精神が高揚する）」という。

濟寧の太白樓・太白酒樓は、卓越した詩才に富む酒仙李白に對する敬慕の念が生みだし、後世の詩人たちは李白に想いを馳せつつ長く詠み繼いできた詩跡なのである。

【晴川閣】

明の漢陽太守・范子箴が嘉靖五年（一五二六）から同八年にかけて、長江のほとり、龜山（湖北省武漢市漢陽區の山、舊稱は大別山）の東麓の禹功磯上に建てた樓閣の名。唐の崔顥「黃鶴樓」詩の名句「晴川歷歷^{りり}たり 漢陽の樹」にちなむ命名であり、長江對岸の黃鶴樓と遙かに向きあい、雄大な眺望を楽しめた。明の蕭良有「將に北上せんとして、晴川閣に遊びて懷い有り」、傅淑訓「晴川閣の野眺」、袁宏道の「晴川閣に登りて武昌を望む」、孔尚任の「晴川閣に登る」、蕭企昭「雨に瀟湘に泊す」などの詩が作られて、黃鶴樓とともに、明清期、文人墨客の登臨の詩跡となる。萬曆三十六年（一六〇八）に成る袁宏道の七律の頷聯には、句中對を用いて、壮大・華麗な江山遠景圖を描く。

百里帆檣千里水 百里の帆檣 千里の水
一層城郭幾層山 一層の城郭 幾層の山

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

續く清の劉子壯「黃鶴樓」詩にいう。

晴川與黃鶴 晴川（閣）と黃鶴（樓）と
氣勢遙縱橫 氣勢 遙かに縱橫たり

また清の查慎行の七律「漢陽の晴川閣」の中央二聯には、こ
ういう。

苦謙過客多題壁 苦^{はな}だ謙う 過客の 多く壁に題するを
却笑神仙盡好樓 却^{はな}って笑う 神仙の 盡く樓を好むを
粉堵日斜浮鄂渚 粉堵（白壁） 日斜めに 鄂渚（長江中）
に浮かぶ

蒲帆風急下黃州 蒲帆 風急に 黃州（下流の黃岡）に下る
晴川閣が名高い詩跡であったことは、題壁詩の多さに辟易するの句によって明白であろう。前聯の自注に「閣の傍らに新たに方士書院を創る」とある。現在の晴川閣は、一九八三年の再建である。

【寺 觀】

【泉州開元寺・雙塔】

福建省泉州市街の中心部、鯉城區の西街にある古刹の名。
「唐・武后の垂拱二年（六八六）、居民黃守恭の宅園中の桑の樹に、忽ち白蓮の花生ず。因りて宅を捨てて寺と爲す。：天下の開元寺の第一爲り」（『方輿勝覽』一二、泉州、開元寺）という。初め蓮花寺（興教寺、龍興寺）といい、開元二六年（七三

中國詩文論叢 第三十集

八)、開元寺となる。閩南(福建省南部)を代表する佛教寺院である。雙塔は境内の兩側にあり、東西塔・紫雲雙塔などともいう。ともに五層六角形の(花崗)石造で、精緻な浮き彫りがある。このうち東塔(鎮國塔)は、はじめ木造(八六五年)、南宋の嘉熙二年(一二三三)、石造となる。高さ四八・二四メートル。東塔に刻まれている明・詹仰庇の詩「雙塔を詠ず」には、
 石塔雙飛縹渺間 石塔 縹渺(高遠)の間に雙び飛び
 凌虛頂上結金團 虛(天空)を凌ぐ頂上に 金團(青銅製の相輪)を結ぶ
 と歌われている。西塔(仁壽塔)も、はじめ木造(九一六年)、南宋の紹定元年(一二二八)、石造となる。高さは約四四メートル。

泉州市歴史研究會編『泉州名勝詩詞選』(福建人民出版社、一九八三年)には、前掲の詩のほかに、明の黃鳳翔「塔燈」、周廷鑑「紫雲の尊勝閣に僧を訪ぬ」、黃克梅「紫雲雙塔にて雨に對す」、黃景昉「開元寺中に暑さを避く」、清の龔顯曾「陳鐵香榮仁・王道義晨曜と偕に開元寺に遊ぶ」などの詩を収めるが、大半が泉州付近の人であり、開元寺及び雙塔は、結局のところ詩跡としてはあまり成長していない。龔顯曾の五言古詩は、「紫雲寺の雙塔は、地より出でて 高くして層層たり」の句で始まり、天空高く上昇する雙塔の勢いを、二頭の青黒い龍に見立てて歌う。

遙天兩蒼龍 遙天の 兩蒼龍
 湧出如飛騰 湧き出でて 飛騰するがごとし
 雙塔の登覽は、現在、禁止されている。

【墳墓】

【于忠肅墓】

明の于謙(諡は忠肅)の墓は、成化二年(一四六六)、冤罪が晴れた後の造營(一九八二年の重修)に成り、現在の浙江省杭州市の名勝・西湖の西南、西湖區の三臺山下にある。于謙(一三九八―一四五七)は、當地―錢塘(杭州市)出身の、著名な政治家である。正統一四年(一四四九)、土木の變後、兵部尚書となって景帝を擁立し、蒙古(オイラト部)の南侵に抵抗して都城を守った。しかし景泰八年(一四五七)、英宗が復位すると殺され、翌年、ここに歸葬された。

于謙は、いわば國家に忠誠を盡くしながら非業の死を遂げた忠臣、民族の英雄である。明末・清初の黃周星の七絶「西湖竹枝」詩には、都城を防衛した功績を、「山川の改まらざるは英雄に仗る、浩氣は能く岱麓の松を排す(盛大な氣概は泰山の松を押しおけることができるほどだ)」とたたえた後、同じく西湖の山麓に埋葬された宋の抗金の英雄・岳飛と並べて、

岳少保同于少保 岳少保(飛)は 于少保(謙)に同じ
 南高峰對北高峰 南高峰は 北高峰に對す

と歌う。

また抗清の戦列に加わった屈大均は、五律「于忠肅の墓」のなかで、國家のために奮闘した功臣の、悲惨な結末を嘆く首聯、

一代勳猷在 一代の勳猷（功績）在り

千秋多涕淚 千秋 涕淚多し

で歌い起こし、自らも于謙に見習って南明の抗戦の士氣を鼓舞して國土を回復したい、という願望をこめて、

墓前頻拜手 墓前にて 頻りに拜手（合掌拜禮）して

願借魯陽戈 魯陽の戈を借らんことを願う

と結んでいる。魯陽の戈とは、『淮南子』覽冥訓に見える楚の魯陽公の故事―春秋時代、魯陽公が韓と戦い、激戦の最中に日が暮れようとしたので、戈を手に太陽をさし招いたところ、太陽は三十度ほど元へもどったという―を用いて、不利な形勢を挽回して國土を回復する武力をたとえたものである。

また清初の孟良揆の七律「于忠肅の墓」の前半には、

曾從青史弔孤忠 曾て青史（史書）に従いて孤忠を弔いしに

今見荒丘岳墓東 今見る 荒丘（荒れた于謙墓） 岳（飛）

墓の東

冤血九原應化碧 冤血 九原（墳墓） 應に碧と化すべし

陰燐千載自沈紅 陰燐（鬼火）千載 自から紅（丹心）を沈

めん

と歌う。第三句は、『莊子』外物篇に見える故事―周の襄弘は

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

讒言されて蜀で死に、その血は三年後に碧玉に変わった―を踏まえて、冤罪で死んだ于謙の恨みの血は、埋葬された墳墓の中で、きつと碧玉と化して發光するであらう、の意。永遠不朽の英靈の輝きを確信する表現である。岳墓の〈東〉字は押韻のために置かれ、本来なら〈南〉とすべきところである。

この後も、國家の存續に貢献した于謙の偉大な功績と哀れな末路を慨嘆した詩が歌い繼がれた。清の王時翔の詩「于忠肅公の墓」にいう。

社稷功千載 社稷（國家） 功千載

湖山土一抔 湖山 土一抔（墳墓）

清の蔣士銓にも、「于忠肅公の祠・墓に謁す」（謁于忠肅公祠墓）詩がある。

【邊境】

【烏魯木齊】

新疆ウイグル自治區の首府・烏魯木齊市は、天山山脈の北麓、ジュンガル盆地の東南隅に位置する。乾隆二〇年（一七五五）、清朝がジュンガルを平定し、乾隆二八年（一七六三）、この地を迪化と命名し、土地の言葉を用いて烏魯木齊とも稱した。烏魯木齊とは、ウイグル語で「鬭争」の意とも、あるいはジュンガル部の言葉で「美しい牧場」の意ともされる。

中國西北の邊境、烏魯木齊の詩跡化は、ひとえに清の紀昀の

中國詩文論叢 第三十集

『烏魯木齊雜詩』一六〇首による。乾隆三三年（一六七八）、紀昀は、罪に問われようとしていた姻戚、兩淮鹽運使の盧見曾に、その情報を漏らしたかどで罪を得、乾隆三五年（一七七〇）二月、召還の命が下るまでの二年間、新疆の烏魯木齊に流された。『烏魯木齊雜詩』は、召還の命を受けた翌年（乾隆三六年）の仲春二月、東に歸る旅の途中、この異郷の風土や習俗・物産などを追想して作った一六〇首の七言絶句であり、それを風土・典制・民俗・物産・遊覽・神異の六項目に分類して収めている。内容が珍奇であるため、全詩に懇切な自注を付した、斬新な形態である。「風土」一三首中の一首にいう。

山田龍口引泉澆 山田 龍口 泉を引いて澆ぐ

泉水惟憑積雪消 泉水は 惟だ積雪の消ゆるに憑る

頭白農夫年八十 頭白き農夫は 年八十

不知春雨長禾苗 知らず 春雨 禾苗を長せしむるを

―山地の田畑には、龍口（取水口）から水を引いて灌漑する。

その水は、もっぱら山上の雪解け水だけにたよっている。（ここ烏魯木齊では）八〇歳にもなる白髪の農夫でさえ、春に降る雨が、稲の苗をそだてることなど知らないのだ。―

紀昀の自注にいう、「歳に或いは雨ふらず、雨ふるも亦た僅かに一二次（二回）のみ。惟だ水に資りて田に灌ぐ。故に田無きを患えずして、水無きを患う。水の至らざる所は、皆な棄地（農作を放棄した土地）なり。其の水を引いて山を出づるの

處、俗に之を龍口と謂う」と。

方言「龍口」を用いて、當地の農耕が全面的に天山山脈の雪解け水に依存し、中國内地のように、春の降雨に影響されないことを詠む。

もう一首、「物産」六七首中からあげる。

山珍入饌只尋常 山珍 饌に入るは 只だ尋常

處處深林是獵場 處處の深林 是れ獵場

若與分明評次第 若し與に分明に次第を評せば

野驃風味勝黃羊 野驃の風味は 黃羊に勝る

―山間のうまい食べ物が宴席のご馳走に並ぶのは、ごく当たり前。到る處の深い林が、好い獵場なのだ。もし明瞭に等級をつけるとすれば、野生のラバのおいしさは、黃羊よりもまさっている。―

紀昀の自注にいう、「野驃は動もすれば輒ち群れを成し、肉は頗る腴嫩なり（脂がのって柔らかい）」と。

【伊犁】

新疆ウイグル自治區の西北端にある伊寧市は、古くはジュンガル汗國の本據であった。それを滅ぼした清朝は、乾隆三二年（一七六七）、イリ河の北岸に惠遠城を建て、伊犁將軍に統治させた。

國境に近い、この邊境の詩跡化は、清の洪亮吉の「伊犁紀事

詩四十二首」による。洪亮吉は嘉慶四年（一七九九）の八月、時政を批判した上書が激烈であったため、不敬罪に問われて、新疆の伊犁に流され、翌年の二月、惠遠城に到着した。その百日後の閏四月には赦されて、五月、歸郷の途につく。「伊犁紀事四十二首」は、その年（嘉慶五年）、伊犁の風土や當地での見聞などを詠んだ七言絶句の組詩であり、簡略な自注を付した詩が多い。その中から二首をあげる。

古廟東西關廣場 古廟の東西に 廣場ひろば開け

雪消齊露粉紅牆 雪消えて齊しく露ある 粉紅の牆

風光穀雨尤奇麗 風光 穀雨 尤も奇麗

蘋果花開雀舌香 蘋果の花開いて 雀舌香し

—古い廟の東西に廣場がひろがり、雪が消えて淡紅色に塗られた壁が一齊に現れた。ここの風景は穀雨のころ、とりわけ目新しく美しい。リングの花が開き、雀舌の花が清々しくにおいたつ。—

穀雨は二十四節氣の一つで、晩春三月（舊曆）の中氣、新曆では四月二〇日ごろにあたる。古廟はイスラム教の寺院なのであるうか。西域の遅い春の、獨特の美しい景色が描かれている。

遊蜂蛺蝶競尋芳 遊蜂 蛺蝶 競いて芳を尋ぬ

花事初紅菜甲黃 花事初めて紅にして 菜甲黄なり

只有塞垣春燕苦 只だ塞垣 春燕の苦有るのみ

一生不及見雕梁 一生 雕梁を見るに及ばず

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

—蜂や蝶が競いあうように花を求めて飛ぶ。花々がようやく紅く咲き、出たばかりの蔬菜の葉は黄色。ただここの邊境地帯の、春になって現れる燕だけは苦しみばかり、生涯、豪華な邸宅を見ることなどないのだ。—

洪亮吉の自注にいう、「春燕は皆な土室の中に巢く」と。

【關 隘】

【嘉峪關】

明初の洪武五年（一三七二）、將軍馮勝が、モンゴル軍を撃退して甘肅の地を平定したとき、西方の防備の據點として設けた關城（城壁に圍んだ關門）であり、現在の甘肅省嘉峪關市の西北五キロの地にある。明代の萬里の長城の西端に位置し、東端の渤海灣に臨む山海關と、東西一對をなす軍事上の要地である。その名稱は、峻險な嘉峪山の西麓に置かれたことに基づく。

嘉峪關城は、全周〇・七キロ強、二重の城壁（高さは一〇メートル）から成り、東西の兩門上には三層の城樓が建つ。西域と中國内地を結ぶ交通幹線上に位置し、南には白雪を戴く祁連山脈が連なり、北にはゴビ砂漠が廣がっている。

嘉峪關は、明の陳其學「防秋（邊境防備）せんとして嘉峪の樓に登りて事を紀す」三首、萬曆ごろの徐養量「嘉峪關漫記」詩に見えるが、詩跡となるのは遅れて、清代、新疆へ流刑された洪亮吉や林則徐たちによる、といつてよいだろう。

中國詩文論叢 第三十集

嘉慶五年（一七八〇）、洪亮吉は恩赦を受けて新疆の伊犁から歸る途中、長篇の五言古詩「嘉峪關に入る」詩を作った。詩は「瀚海（ゴビ沙漠）亦た已に窮まり、關門 忽ち高く矗（そび）ゆ」で始まり、内地に無事に歸れる喜びをこめて、嘉峪關城に到着した情景を、こう歌う。

風遞管鑰聲 風は管鑰の聲を遞えて

巖扇忽然拓 巖扇 忽然として拓く

城垣金碧麗 城垣 金碧のごとく麗しく

始見瓦作屋 始めて見る 瓦もて屋を作るを

「風が城門を開く音をつたえると、岩のようにそそり立つ城門が突然開かれた。嘉峪關の城壁は黄金・碧玉のごとくきらびやかであり、今ようやく瓦屋根の建物を目にできたのだ。」

他方、林則徐は、道光二年（一八四二）、五八歳のとき、アヘン戦争の責任を問われて新疆の伊犁へ流される途中、「出嘉峪關感賦」（「嘉峪關を出でて感じて賦す」）四首を作った。其一是、「天下の雄關」嘉峪關の高大・雄偉な偉容を歌いあげた佳品である。

嚴關百尺界天西 嚴關 百尺 天の西を界り

萬里征人駐馬蹄 萬里の征人 馬蹄を駐む

飛閣遙連秦樹直 飛閣は 遙かに秦樹に連なって直く

繚垣斜壓隴雲低 繚垣は 斜めに隴雲を壓して低し

天山巉削摩肩立 天山は巉削として 肩を摩して立ち

瀚海蒼茫入望迷 瀚海は蒼茫として 望に入りて迷う
誰道崤函千古險 誰か道う 崤函は千古の險なりと
回看只見一丸泥 回り看れば 只だ見るのみ 一丸泥

「この堅固な關所は、高さ百尺の城壁に圍まれて、天空の西の境界となる。萬里のかなたへ赴く私は、こでしばし馬の歩みをとめた。關所の高い城樓は、遠く秦（陝西）の樹々にまっすぐ連なり、うねりゆく長城は、斜めに隴（甘肅）の雲を押さえて低く伸びゆく。天山（祁連山脈）の峰々は、肩をこすりあわせて險しくそそりたち、瀚海（ゴビ沙漠）は、あてもなく廣がって眺める目を惑わせる。いったい誰が言うか、函谷關は、永遠不變の天下の要害であるなどと。ふりかえって見やれば、一個の丸い泥の固まりのようではないか。」

西域と本土との境界をなす嘉峪關は、その後も詠みつがれ、施補華「嘉峪關を出でて作る」、宋伯魯「嘉峪關を發す」、裴景福「嘉峪關に登る」などの作が傳わり、漢・唐時代の玉門關と共通するイメージを備えた、新しい詩跡である。

【山海關】

明代に築城された萬里の長城の、東端にある關城・山海關は、遼寧省との省境に近い、河北省の東端、秦皇島市の東北一五キロの山海關區にある。明初の洪武十四年（一三八二）、將軍徐達が建設したとき、北は燕山に依り、東は渤海に面するため、

山海關と命名された。長城の東の起點にあるため、「天下第一關」ともいう。山海關城は全周約四キロ、城壁の高さは一四メートル、厚さは七メートル、東西南北の四門には城樓が立つ（現存するのは東門の城樓のみ）。

山海關は、山と海に夾まれた險固な地勢に置かれた、東北・河北間の軍事的要衝である。明朝は當初から防遼を重視して、有名な將帥―熊廷弼・袁崇煥・戚繼光・孫承宗らが嚴重な防備に當たり、都城（現・北京）を防禦する要地となり、詩中にも詠まれ始めた。明代前期の張寧は、都城を守る軍事要塞としての堅固な山海關を詠む「百二の山河 帝京を擁し、鐵關 金鎖 長城に接す」で始まる七律「山海關に過ぎる」詩のほか、「山海關に至る」二首も作っている。明代後期の黃洪憲の七律「過山海關」（山海關に過ぎる）詩は、詩跡として山海關を確立した代表作であろう。

長城古堞瞰滄瀛 長城の古堞 滄瀛を瞰
 百二河山擁上京 百二の河山 上京を擁す
 銀海仙槎來漢使 銀海の仙槎 漢使來り
 玉關秋草戍秦兵 玉關の秋草 秦兵戍る
 星臨尾部雙龍合 星は尾部に臨んで 雙龍合し
 月照平沙萬馬明 月は平沙を照らして 萬馬明らかなり
 聞道遼陽飛羽急 聞道く 遼陽 飛羽急なるを
 書生急欲請長纓 書生 急に長纓を請わんと欲す⁽¹⁰⁾

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）

―長城東端の古い城壁は、青い大海を俯瞰し、敵軍の百分の二の兵力で守れる堅牢な地勢の山海關が、帝都を固守している。その昔、漢の使者・張騫は海上から筏に乗って銀海（天の川）に赴き、秦の武將・蒙恬の精兵が西の果て、秋草の茂る玉門關を守った。蒼龍星（木星）が東方蒼龍七宿の尾（星座）に近づいて同時に上空に現れ、月が廣大な沙漠を照らして（外敵の）軍馬の姿が鮮やかに浮かび上がる。聞くところによれば、遼陽（遼寧省）から緊急の軍事情報が届いたという。書生たる私も筆を投げ捨てて、ただちに從軍して敵を倒したく思うのだ。―

詩は、格調の高い登臨抒情の作であり、愛國の熱情が流露する。第五句の星座の描寫は戰爭の起る予兆であり、第八句は前漢の終軍の故事を踏まえての表現である。

山海關は、續く清朝でも詠みつがれた。清初の康熙帝（愛新覺羅玄燁）は「山海關」詩の序で、「山を連ね海に據りて、地は固に金湯（堅固な備え）。明の時、倚りて險要と爲し、重鎮を設けて、以て之を守る。我が朝は鼎を燕京に定め（北京に國都を定め）て、四十年に垂んとし、關門は閉ざさず。…」と述べた後、

重關稱第一 重關は 第一と稱し
 扼險倚雄邊 險を扼え 雄に倚る邊り
 地勢長城接 地勢は 長城に接し
 天空蒼海連 天空は 蒼海に連なる

中國詩文論叢 第三十集

云々と歌う。

湯石曾も五律「山海關」の中央二聯で、立地の險要な形勢を壯大に歌っている。

地接長城險 地は 長城の險しきに接し

天浮渤海寬 天は 渤海の寬きを浮かぶ

連山趨碣石 連山は 碣石（山）に趨り

積水見辰韓 積水は 辰韓（朝鮮）を見る

碣石山は、河北省の東端、秦皇島市昌黎縣の北に位置し、魏の曹操が海を眺めて詩を詠んだ名山である。

險固な地勢に據る山海關は、明清期、都城を防衛する要地として詠まれ續けた詩跡である。

【注】

- (1) 詩跡の定義・形成過程等に關しては、寺尾剛『詩跡』研究の意義について（『中唐文學會報』二〇〇〇、二〇〇〇年）、「李白における武漢の意義——『詩的古跡』の生成をめぐって」（『中國詩文論叢』第八集、一九八九年）、松尾幸忠「中國における『詩跡』形成についての試論——日本の『歌枕』との比較考察から」（『日本中國學會報』第五一集、一九九九年）、植木久行「名詩のふるさと（詩跡）」（『漢詩事典』「大修館書店、一九九九年」）、「中國における『詩跡』の存在とその概念——近年の研究史を踏まえて——」（『村山吉

廣教授古稀記念 中國古典學論集』汲古書院、二〇〇〇年）

「中國歷代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開——安徽省宣城市區・池州市、および山東省濟南市區を通して——」

（『中國詩文論叢』第二六集、二〇〇七年）、松浦友久「『詩跡』と『歌枕』——イメージの喚起力——」（『萬葉集』という

名の雙關語——日中詩學ノート——大修館書店、一九九五年）

「詩跡（歌枕）の旅——名詩のふるさと——」（『漢詩——美の在りか——』岩波書店、岩波文庫、二〇〇二年）等参照。

- (2) 「雲」は「城」の誤りであろう。「大明一統志」八六、大理府、點蒼山の條所引の詩句参照。

- (3) 本稿は、雲南省詩詞學會・雲南大學中文系選注『雲南歷代詩詞選』（雲南人民出版社、二〇〇二年）も参照した。

- (4) 清初の文人たちの盤山での交流を扱った專論に、竹村則行「盤山に集った清初文人（宋肇・王士禎・朱彝尊・洪昇）と智朴「盤山志」について」（九州大學大學院人文科學研究院「文學研究」九九、二〇〇二年）があり、本稿でも参照した。

- (5) 張玉書ら奉敕撰『佩文齋詠物詩選』海類には、「滇海曲十二首」の中から三首を収める。

- (6) 滇池は、明の王圻・王思義編集『三才圖繪』地理十二卷に、滇池の圖（昆明池圖）と解説を収めている。本稿は、雲南省詩詞學會・雲南大學中文系選注『雲南歷代詩詞選』も参照した。

(7) この言葉は、『大明一統志』一、順天府、盧溝橋の條を踏襲する。

一部である。

(8) 解釋は呂小薇・孫小昭選注『西湖詩詞』（上海古籍出版社、一九八二年）を参照した。

(9) 本稿は、孫一峰主編『嘉峪關詩選』（甘肅人民出版社、一九八七年）を参照した。

(10) 詩の文字は吳紹禮・張鎮編著『古代風景詩譯釋』（黑龍江人民出版社、一九八四年）などによる。清の沈季友編『橋李詩繫』一四には、「秋草」を「衰草」、「萬馬明」を「萬馬鳴」に、尾聯を「聞道邊陲烽燧息、書生直欲勒燕銘」に作る。

○本稿の執筆には、現在、編纂中の『中國詩跡事典』（假題）に収める矢田博士（醫巫閭山・盤山・晴川閣・烏魯木齊・伊犁・嘉峪關）、丸井憲（點蒼山・泉州開元寺・滇池）、許山秀樹（采石太白樓「謫仙樓」）、紺野達也（薛濤井・盧溝橋）、大立智砂子（濟寧太白樓）、後藤淳一（于忠肅墓）、松浦史子（山海關）の諸氏の原稿も参照した。また楊剛編著『中國名勝詩詞大辭典』（浙江大學出版社、二〇〇一年）も参照したが、その所収作品に對しては充分な検討を加えてゐる。

○本稿は、科學研究補助金（基盤研究（B））「中國文學研究における新たな可能性——詩跡の淵源・江南研究の構築——」（課題番號二三三〇〇六七、研究代表者植木久行）の研究成果の

元明清期に誕生した詩跡初探（植木）